

研究ノート

在日フィリピン人の関係についての人類学的考察

——「日本国籍」をもつ人の事例——

永田 貴聖*

I はじめに

90年、出入国管理及び難民認定法が大幅に改定された。この改定を機に日本人と再婚したフィリピン人配偶者のこども（日本人の連れ子）、日系三世など日本人と親族関係を持つフィリピン人が「定住」の在留資格を取得し¹、日本で居住することが可能になった²。

これ以降、日本に居住するフィリピン人は以前のように既婚女性だけではなく³、「定住」資格により居住する連れ子や日系三世たち、そして、超過滞在のフィリピン人など多様化しつつある⁴。さらに、日本人と親族関係にあるフィリピン国籍者だけではなく、「日本国籍」をもつフィリピン人が多く存在している。

フィリピンのメトロ・マニラ首都圏を中心にして、80年代以降増加した日比間の国際結婚により生まれた多くの二世がフィリピン人の母親とともに日本国籍を保有したまま暮らしている。近年、「新日系人」と呼ばれているフィリピンで育ったこの様な二世たちの一部が日本に移動しつつある。

2006年、セブ日系人会が中心となり、何らかの理由により日本人の父親と離別し、母子家庭で育っている二世たちの就労や身元確認を支援するため、「新日系人ネットワーク・セブ（以下、SNN）」が結成された〔『まにら新聞』2006年3月12日〕。現在、日本の戸籍に名前が記載されている二世たちの数は6万人近いという説もあり、身元確認調査が実施されている〔Ibid.〕。

2006年5月、SNNが、二世165人を対象に調査を実施した。そのうちの約5割が日本国籍を既に保有していたのである〔『まにら新聞』2006年5月12日〕。既に、SNNは、日本国籍を保有していることが明らかになった日比二世たちに対して、日本のパスポートの再取得や、日本での就労斡旋を行っている。二世たちの一部は、SNNの後押しにより、来日し、就労している〔『まにら新聞』2007年4月25日、同年8月28日〕。

これらの現状を踏まえ、本稿では、日本国籍を維持したまま、フィリピンで育った日比二世の先駆的な事例として、30代前半の女性Aさんに焦点を当てたい。Aさんは、フィリピン、日本国際結婚夫婦から生まれ⁵、フィリピンで育ち、8年前に来日した。彼女がフィリピン・日本両国の境界線の狭間にいる様々な人々と関係を形成する過程が文化人類学的な調査に基づき、個人誌として記述されている⁶。

マニラ首都圏を中心に暮らす日比国際結婚二世たちは、日本語を習得する機会や、現地の日本人社会と係わる機会が決して多いわけではない。果たして、これらの二世たちが日本国籍をもつという理由だけで「日本人」と言えるだろうか。もし二世たちがAさんと同様に就労のために来日するようになると、日本人よりも、フィリピン人との関係を重視するだろう。

Aさんの事例は、フィリピンで育った二世たちが来日した後、日比の国境を越えて関係を形成する予見的な事例になるだろう。ここでは、Aさんが「フィリピン人」として、考察がされている。

キーワード：フィリピン人移住者、日本国籍

*立命館大学大学院先端総合学術研究科 2004年度入学 共生領域

Ⅱ Aさんの個人誌

1、来日から職探し。

Aさんの両親は、父親が駐在員としてマニラに滞在していた頃、母親と出会い、結婚した⁷。結婚後、Aさんの家族は、父方の祖父母とともに父親の実家で、3歳まで暮らしていた。しかし、Aさんの祖母がフィリピン人だった母親を家庭内において差別したことが原因で、Aさんの母親は、彼女とみごもっている妹とともに、マニラ首都圏の実家のあるアパートに帰った。

その後、Aさん姉妹は、祖父母、叔母とともに生活を開始する。長女で、母親からの躰が厳しかったAさんは学校でも優等生で、成績も常にトップクラスだった。母親、祖父母や、親戚もAさんが大学に進学し、専門的な職に就き、将来的には家族を養うことを期待し、進学を援助した。そして、Aさんもその期待に応え、マニラ首都圏の有名な私立ハイスクールに進学した⁸。

しかし、当時から家計は楽ではなかった。Aさんは、ハイスクール時代、洗濯などの仕事をして家計を助けていた。それにも関わらず、優秀な成績で卒業し、マニラ首都圏にある国立大学の作業療法士のコースへの進学を果たす。大学進学後も、学費や生活費を払うためにショッピングモールで販売員として働いていた。

父親はその間、離婚せず、母親とは断続的に手紙や電話などで連絡を取っていた。しかし、父親は、仕送りを二年続けるとすると、突然連絡が途絶え、また再開するという様子だった。

Aさんは当時の状況を次のように語っている。

当時、お母さんも学校を卒業しているわけでもないから、洗濯とか、家政婦とかの仕事は何軒も掛け持ちして何とか家計を支えていた。フィリピンではこういう仕事はお金にならないし、体力的にきついから大変だったと思う。

こどもの頃は全然知らなかったけど、お父さんからは数ヶ月に一度連絡があって、仕送りもあったみたい。でも、お父さんはいい加減だったから仕送りも二年続いてちょっと楽になったと思うといきなり打ち切ったりしていた様だった。そんな感じだったからお母さんは全然当てにしていなかったみたい。実際、お父さんが仕送りしていたことを聞いたのは私が日本に来てから。

だから、私も小学校ぐらいにはお母さんやお婆ちゃん、叔母さん、大人たちが朝早くから仕事でいないから、家の手伝いしていた。もちろん、妹も手伝った。私は小学校の高学年ぐらいになると近所のお金持ちの家で洗濯とかをして、お金を稼ぎ始めた。ほんと、みんなずっと働いていて大変だったのをよく覚えている⁹。

Aさんが20歳の時、休学と復学を何度か繰り返し、働きながら大学に通っていた頃のことであった。高校時代から交際していた恋人（現在の夫）との間に長女をみごもり、未婚のまま出産する¹⁰。この事を機に、Aさんは大学を中退し、妹とともに日本で働くことを決意する。日本に暮らしていた日本人の夫を持つ叔母に連絡を取った。叔母はAさん姉妹に仕事を紹介し、部屋を提供することを約束する。

当時、Aさんの夫の家族は事業に失敗し、結婚できる状況ではなかった。Aさんは夫と婚約だけを済ませ、来日後は自身の家族だけではなく、夫の家族も支えるつもりだった。また、父親に再会したいという気持ちも強くあった。

当初、日本から父親を通して、戸籍などの書類を取り寄せ、失効していた日本のパスポートを再申請する予定だった。しかし、父親となかなか連絡が取れず、叔母はある外国人支援グループから紹介を受けた行政書士を仲介にして、父親と連絡を取り、説得して、手続きのための書類をフィリピンに送付した。その時、最初に叔母と連絡を取ってから一年が過ぎていた。彼女は21歳のとき、叔母に航空機代を借りて当時18歳だった妹とともに来日することができた。

私はこどもができたので、本当はすぐに結婚したかった。でも、彼の家が大変でそれどころじゃなかった。それに、最初は彼も結婚するのを躊躇していた。だから私が日本に行って、自分や家族を支えるってみんなに宣言したの！そのために、日本で働きたいと。私がそう言い張ったら、妹も一緒に行くと言い出した。昔から

仲が良かったから嬉しかった。

それから、日本人と結婚した叔母に手紙を書いて、電話をして話した。はじめは、私たちが直接父親と連絡を取るつもりだった。でも、手紙を書いても返事がなかったから結局、叔母さんが父親に連絡を取ってくれた。それでも、お父さんはなかなか書類を送ってくれない。いま、考えるとお父さんは私たちにすごく責められて、無理やりお金を送られると考えていたと思う。私たちは、ただ自分たちで日本に来て、働いて稼いだかっただけなのに。ただ仕事が欲しかっただけ。もちろんお父さんに会いたいというのもあったけど¹¹。

Aさんと妹は空港に到着し、父親と再会した。お互いの戸惑いが消えないまま、二週間、父親のマンションに滞在した後、叔母の紹介で仕事を得るために叔母が住む県に移った。Aさんの妹は、叔母の夫の紹介で隣の県の工場に住み込みで働くことになった。Aさんは叔母夫婦宅に居候しながら、叔母の紹介で、中国人のホステスが多く在籍するスナックで働きはじめる。

その後、彼女は日本人ホステスのいる店を転々とし、23歳の時、日本人とフィリピン人女性夫婦が経営し、ホステス全員がフィリピン人の店で働き始めた。そして、この頃叔母の家を出て、独り暮らしを始める。

その時は、どんな仕事でも良かった。もちろん、ホステスをするのは抵抗があった。だって、フィリピンでもこの仕事したことなかったし。でも、妹にはさせたくなかった。あの子には昼に働く仕事をして欲しかったから、私が夜働いて、彼女が昼に働くことにしたの。ホステスの給料が良いというのもあった。

2、フィリピン人、日本人との関係の断片、筆者との係わり。

ここでは、多くのフィリピン人が就業しているスナックやラウンジが集まる繁華街でのフィリピン人、日本人の関係の断片を記述する。

Aさんは、日本国籍をもっているものの、日本語や生活習慣を、完全に身につけているわけではない。彼女はフィリピンで育つ中で身につけた文化や、言語を操るフィリピン人として、日本での限られた就業機会である飲食業の世界に入っていった。在日フィリピン人の多くが口コミや親戚、友人の紹介でバーテンダーや、ホステスの仕事を「選択」する。これらの店の多くは日本の中の「フィリピン人イメージ¹²」を売りするために、フィリピン人女性をホステスとして雇っている。多くの店は、元「エンターテイナー」の既婚女性たちにより経営されている。

在日フィリピン人の中には、日本において自身の経験を生かせる唯一のビジネスとして、スナックやラウンジの経営を始める人が多い。経営者たちは日本人の夫とともに店をもつか、日本人を共同経営者やパトロンにして商売をしている。これらの小規模な店は、興行資格を取得する女性が働く大規模な店の様相とは大きく違う¹³。

Aさんが働く店もやはり、フィリピン人女性が日本人とともに経営している小規模な店である。彼女はこの店で、日本人と結婚するなどして安定した在留資格を持つ20代前半から40代前半までの3人から5人のフィリピン人女性とともに働いている。この様な店には、40代から60代ぐらいまでの日本人男性が客としてやってくる。常連の中年日本人男性たちは、多くの「エンターテイナー」が働く大型店にはない別の関係を求めている様子もみえる。

大型店に「エンターテイナー」として就労する女性たちは自由な外出が制限され、店内でも客に女性たちの分のドリンクや料理を注文することを勧め、ノルマを達成することが求められる。日本人男性たちは「エンターテイナー」たちと親しくなろうとすると女性たちの要望を容易に受け入れる。そして、両者の関係は最初から金銭を介在させたものに進展する傾向になる。

しかし、小規模な店では、フィリピン好きの常連客と安定した在留資格をもつホステスたちがお酒とカラオケマイクを片手に共通の友人知人の噂からフィリピンの慢性的な経済不振、日本社会の批判までと多彩な内容の会話で楽しい時間を過ごす雰囲気がある。

また、これらの店には、繁華街の他の店で働くフィリピン人女性、フィリピン料理店で働くフィリピン人男性や、バンドマンのフィリピン人たちが雑談や別の単発の仕事の情報などを得るために顔を出している¹⁴。他にも、自営業としてフィリピン料理の宅配をしているフィリピン人既婚女性が注文を取りに来る姿もよく見かける。その女性は注文を取ったあと、一旦自宅に戻り、台所で料理を作った後、再び注文を取った店に料理を配達するのである。

繁華街にあるスナックやフィリピン料理店は複数のフィリピン人が繋がるネットワークの拠点として、情報交換の場になっているのである。そして、このようにフィリピン人が集まり、談笑し、情報交換をする店は、日本の大都市の繁華街には多く存在する。

筆者とAさんが出会ったのは、Aさんが働く店の近くにあるフィリピン料理のレストランだった。このレストランも多くのフィリピン人が集まるネットワークの拠点の一つである。繁華街の雑居ビルの中にある15人程度を収容できるそのレストランにはラウンジに出勤前のフィリピン人女性や男性バーテンダー、日本人客とフィリピン人ホステスの同伴カップルが集まっている。そこのフィリピン人ウエイターと会話していたとき、Aさんが筆者に話しかけてきたのが初対面だった。同年代の日本人男性と会う機会があまりなかったAさんにとって、筆者の存在は珍しかったのだろう。そして、フィリピン人でも、店の客でもない筆者は3つの集団の境界線上に位置する結果となった。Aさんは、境界線上に位置する筆者を、他のフィリピン人にも、仲の良い客にも話せない事を話せる存在であると考えたかも知れない。

彼女は多くのフィリピン人が集まり、フィリピン人ネットワークと核となっているカトリック教会にあるフィリピン人組織とはほとんど係っていない。また、フィリピン人が集まる教会の国際ミサをあまり快く思っていない。もちろん、ミサや、フィリピン人組織の集まりに参加しないフィリピン人は多くいる。しかし、人々は他のフィリピン人組織や、ミサを悪く言うこと、批判することはない。関係が限定されているフィリピン人同士なら、話が噂となり、真意が歪曲されて、他人に伝わっていく危険性がある。また熱心にフィリピン人組織を活動している人に気を使って、批判的なことは話さないというのが常識である。フィリピン人組織と距離を置きたいフィリピン人たちはミサや、組織の活動に参加しない理由を、「教会が家から遠い」、「仕事で行けない」ということにしている。

Aさんが住む都市の某カトリック教会には、教会の小教区に位置づけられているフィリピン人組織が存在している¹⁵。そこで、毎週日曜日、英語とタガログ語の賛美歌を取り入れた国際ミサが行われている¹⁶。この組織は、日本人と結婚しているフィリピン人女性、ミSSIONナリーとして来日しているフィリピン人シスターを中心に運営されている。毎週、礼拝には、100人近いフィリピン人が参列している。しかし、筆者はここで、彼女の親しい友人達に出会うことはあっても、彼女に会うことはなかった。

Aさんはミサの最中に小声の私語や噂話が聞こえ、同じフィリピン人だと言っても嫌いな人間や、会いたくない人間がやってくるその集まりを避けて生活している。彼女はこのような態度、人々を嫌い、教会に行かなくなった。ミサに行かなくなった理由を彼女は次に様に話した。

3年前までは、毎週日曜日にはミサにいったわ。フィリピン人組織の英語ミサに。でも、徐々に足が向かなくなった。人間関係がいろいろあるのよね。あそこ。同じフィリピン人でも会いたくない人とか、避けたい人とかいるのよね。私は今でも教会にはちゃんと行っています。別のカトリック教会に。そこは知っている人いないから、落ち着きますよ。だって教会ってというのは落ち着いて、自分を見つめなおすために、神様に会いに行く場所でしょ！フィリピン人の集まりはまあ楽しいときもあるけど。噂話や悪口だけ聞いても意味なし。本当の教会の意味からすると友達と会うのは別のところでしたらいいことだと思う。

しかし、Aさんはミサに行っている繁華街で働くフィリピン人の友人や筆者を通じてフィリピン人組織の活動や主要メンバーの動向について知っている。Aさんはこれらの人々と係ることにより、間接的ではあるが、フィリピン人のネットワークと繋がっている。

3、家族の再統合。

・両親の復縁

日本に来て、はじめて、いや久しぶりにお父さんに会った。3歳から会ってないし、顔も全然覚えていないでしょ。お父さんの顔は写真でしかみてなかったから。その後、すぐ仕事がある叔母さんの住む街に行った。だけど、妹と連絡とって、必ず月に一回はお父さんの住んでいる家に行って、一緒にご飯食べたりするよ。あと、お父さんは掃除をあんまりしないから、私たちが行くとまず部屋を掃除する。電話は週に一回必ずしている。

もちろん19年間も離れ離れだったから、最初はお互いに気を遣っていたけど、パスポートの再申請を手伝ってくれた行政書士の先生からお父さんのことはしっかりしていて丁寧な人だと聞いていたから、いろいろ話しましたよ。例えば、私たちのこどもの時の苦勞とか。なんで日本に来て働こうかと思ったとか。そして、お母さんがお父さんと別れてからフィリピンですごく苦勞したこととか。

お父さんはちゃんと聞いてくれたわよ。それで、私たちもお父さんが優しい人というのがよくわかった。それからお母さんも日本に時々来るようになって、お父さんとちゃんと話すようになったわ。

Aさんたちの来日時、Aさんたちのパスポート再取得の申請について叔母に助言した行政書士の男性が、父親との関係を回復する上で大きな橋渡しとなっている。彼は何度も、父親がフィリピンにいるAさん姉妹の事を非常に気にしていたことを説明し、なるべく父親と連絡を取ることを勧めていた。そのこともあり、Aさん姉妹は必ず月に一度、父親の家を訪れるようになった。そして、そのことが後に両親の復縁につながっていく。

お母さんが日本に来たとき、私たち姉妹はお母さんに真剣に話したわ。お父さんも良い人だし。歳だから、しばらくは日本で暮らしたらって。あと、お父さんたちが別れた原因は、お母さんと、日本のおじいちゃん、おばあちゃんとの関係があったみたいだし。でも、どうかわからないけど、その時は二人とも亡くなった後だった。だから、お父さんも言わないけど、本当はお母さんと一緒に暮らしたかったみたいだった。

お母さんも短気ですぐ怒るから、今回は我慢して、お父さんに合わしなさいって、言ったわ。姉妹でお願いしたのよ。だから、お母さんもお父さんともう一度一緒に暮らすことを決めた。やっただよ。私たち姉妹頑張ったよ。

フィリピンでは、多くの母親、家族の中の年長の女子たちが、経済的な安定を得るために海外に出稼ぎに行き、家族と離散し、異国で孤独感を味わっている [Parreñas 2001: 81-115]。しかし、移住労働という決断そのものが家族を経済的に支援しなければならないという価値観の産物なのである。

Aさんの場合も、夫の家族、こども、フィリピンの親戚たちに対する責任感や父親、母親に対する想い、社会の価値観からの影響など様々な感情が入り混じっている。この入り混じる様々な感情が両親の復縁を後押しすることにつながったのかもしれない。そして、日本での家族の再統合は次の話が続いていく。

・Aさんの夫の呼び寄せ

本稿では筆者とAさんとの係わりを個人誌の範囲としている。そして、それは調査する筆者の存在もまたAさんの行動に影響を及ぼすと考えている。

筆者はAさんにしばしば彼女の親戚の短期ビザ申請や役所の申請について尋ねられた。彼女は筆者の助言から、公的な制度にアプローチできる方法を把握した。例えば、役所において住民票写しなどの書類の発行を英語で申請できることなどである。Aさんの日本語は会話をする上でまったく問題ない。しかし、読み書きする能力は決して十分ではない。Aさんは英語で書類の申請をできることを知る前、住民票や戸籍が必要な場合でも謝礼を払い、他人に頼んでいた。言うまでもなく謝礼を受け取る側はその作業が謝礼に見合うものではないことを彼女に説明していない。

そして、次に述べることは調査がAさんの選択や関係を形成することに影響していることを明らかにした。彼女が日本にいる間、年に二度、約一ヶ月間フィリピンに帰国し、夫や娘たちとの関係を継続してきた。Aさんの援助もあり、夫の家族が経済的に安定し、4年前、正式に結婚した。結婚後、Aさんは、家族離れ離れの生活から早く抜け出すことを考えるようになりはじめていた。また、男性の接客をする仕事に嫌気をさしていることを何度か述べていた。

一昨年、筆者はAさんから夫と長女が日本で在住資格を取得し、一緒に生活することについての相談を受けた。以前から何度か、筆者はAさんに夫やこどもが「日本人の配偶者等」、「定住者」の在留資格を取得することが難しいことではないことを話していた¹⁷。

相談を受けた後、筆者は入国管理局に同行し、Aさんの日本での確定申告書、戸籍フィリピンでの婚姻証明書、長

女の出生証明など必要書類をできる限り早く取得する事を告げた。その後、3週間程度で書類はすべて揃った¹⁸。そして、申請から約一ヶ月半後、夫と娘は「日本人の配偶者等」、「定住」の在留資格をそれぞれ取得した。その後、Aさんはホステスの仕事を辞め、両親が住んでいる近くの街で夫、長女、妹とともに4人で暮らしている。Aさんと夫は妹の紹介で、同じ工場で働いている。90年の入管法改定後、その街には、在日中国人やブラジル人などが増加している。長女は、外国人の二世たちと共にその地域の公立学校に通っている。

Ⅲ Aさん個人から見える国境を越える関係—「むすび」に代えて—

本稿はAさん個人を対象にした民族誌である。文化人類学において、個性に着目することは必ずしも珍しいことではない。筆者は単に政治経済的な文脈により移動の現象を捉えた研究、従来の在日フィリピン人の集団への考察や既婚女性の職業経歴の調査では十分に組み込まなかったフィリピン人の多様性の一部を記述することに終始した。Aさんの来日前から来日後にかけての関係の広がり注目し、様々な親戚、知人などとの繋がりを通じて、家族と共に日本に住むようになるまでの過程を記述している。

仮に、この調査が政治経済的な移動を考察する調査や、集団としてのフィリピン人を対象とする調査ならば、Aさんの事例は単に、70年代後半以降、フィリピンに進出する日本企業に付随して駐在員となった日本人が現地の女性と出会い、結婚し、離別した後、フィリピンで育った日本国籍を持つ子どもが再び出稼ぎになる現象の一つの「サンプル」であるということに終始しただろう。

しかし、個人を対象とする民族誌を記述するための調査からは、社会現象として移動をとらえる学術的な営為が見落とすかもしれない一人のフィリピン人を取り巻く家族との関係、社会的な規範や、集団的な文化に左右される生き方の様相が見えてくる。その生き方は様々な関係を錯綜させる実践を明らかにする可能性を備えている。

そして、Aさんが日本人、フィリピン人双方を介在させ、国境を越えて関係を形成する実践は、単にAさんだけの事例では留まらない。今後、日比国際結婚の狭間で様々な問題を抱える二世たちが実践する多くの「生き方」の一つとなっていくだろう。

【注】

- 1 これに相当するフィリピン人の在留資格「定住者」の数は、約2万4千人である（『在留外国人年報』平成17年度版）。但し、この中には日本人男性と離婚し、在留資格を変更した女性たちも含まれている。
- 2 これ以降、日系ブラジル人、中国残留孤児帰国者の子孫などを中心とする日系人2世、3世、日本人の連れ子の外国人及びその配偶者の外国人が「日本人の配偶者等」、「定住者」を取得し、居住する数が増加した。この資格の特徴としては就労に関する制限がないことが挙げられる。
- 3 外国人登録上、これに相当する2004年のフィリピン人の「日本人の配偶者等」、「一般永住者」の数は約9万1千人である（『在留外国人年報』平成17年度版）。
- 4 法務省入国管理局によると2007年1月時点で約2万8千人のビザ超過滞在者がいる（<http://www.moj.go.jp/PRESS/070227-2.pdf>, 2007年8月11日検索）。これは、在留資格失効以前に出国しなかったフィリピン人の総計である。
- 5 父親が日本人。母親がフィリピン人。
- 6 本稿の内容は、Aさんが来日前から現在にかけて経験したことについてのインタビュー調査、筆者とAさんの直接の係わりから彼女の社会関係を考察する調査データから構成したものである。調査方法論については紙面の都合上言及しないが、基本的に永田（2005、2006）と同様の方法を踏襲している。
- 7 父親は現在57歳、母親は50歳である。
- 8 筆者は、その人の英語運用能力から学歴や学力の高さをある程度判断している。これはあくまでも個人的な見解である。しかし、過去のアメリカ合衆国による植民地支配、フィリピン国民の約一割が何らかの形で海外に出稼ぎに行っている現実を考えると、英語運用能力は一定の収入を得ようとする人々にとって必要不可欠である。国立大学に入学したAさんの英語力も相当なものである。
- 9 本稿で紹介するAさんの「語り」は主に2005年12月に実施したインタビュー調査から筆者が再構成し、日本語に訳したものである。インタビューは主に英語、タガログ語で実施した。
- 10 夫は現在33歳、長女は10歳である。

- 11 フィリピンでは家族や親戚の中での稼ぎ頭が他の家族メンバーを経済的に援助する習慣が根強く残っている。タガログ語で *utang na loob* (ウータン・ナ・ロオブ、訳「内なる負債」) と呼ばれる。海外で働くフィリピン人たちの多くが自身の核家族だけではなく、いとこやおじ、おばなどにも経済的に援助することが期待されている。また以前、おじやおばから経済援助を受けた経験のある人はそのおじやおばの子どもたちを経済的に援助することにより *utang na loob* を返済するのである。さらに、フィリピンの家族は日本の父系家族主義ではなく、拡大家族主義である。結婚は夫と妻の家族の結合を意味する。そのため、Aさんは未婚で子どもを出産し、夫の家族に自身が家族メンバーであることを示すために夫の家族を援助していたのだらうと推測する。実際にAさんは来日後、夫の妹が台湾に出稼ぎに行く際の職業斡旋料や、夫の両親が経営している青果店で使うトラックなどの費用を負担している。
- 12 日本における「フィリピン人」のイメージに関しては清水 (1996) が議論している。
- 13 2005年4月以降、法務省入国管理局は、「興行」資格要件を厳格化し、従来要件としていた *Artist Record Book* (芸能人登録証、フィリピン政府発行) 取得者ではなく、2年以上の芸能活動、歌やダンスの高等教育を修了していることを要件とするようになった。実際、資格要件厳格化以降、「興行」資格によるフィリピン人入国者は年間約7万人から約4万人に激減し、多くの「フィリピン・パパ」が閉店を余儀なくされた。
- 14 フィリピン人たちの飲食料は日本人男性客とは異なり、一時間5000円程度という「セット料金」ではなく、一杯単位に料金が加算される。そのためフィリピン人の客は値段のことを気にせず気楽に時間を過ごす事ができる。
- 15 詳しくは永田 (2007) 参照されたい。また、首都圏のフィリピン人組織の役割や内部の人間関係についての研究として鈴木 (1998)、マテオ (1999)、Mateo (2000) を挙げておきたい。
- 16 大都市圏のカトリック教会では毎週日曜日にタガログ語によるミサを行なっている。
- 17 筆者の憶測の域を超えないが、当初Aさんの父親が彼女の夫が長女の妊娠後に結婚しなかったことなどから結婚に反対していたと様子であった。しかし、この時期に父親が2人の結婚を徐々に理解し始めたようである。
- 18 フィリピン側の公的な書類が迅速に揃った要因として、Aさんの夫が公的な制度をよく理解し、素早く対応したことが挙げられる。彼は機械エンジニアのコースの大学を卒業し、部品メーカーに勤務していた。

【参考文献】

- 清水展. 1996 「日本におけるフィリピン・イメージ考」『比較社会文化』2 (2)、九州大学: 15-26。
- 鈴木伸枝. 1998 「首都圏在住フィリピン人既婚女性に関する一考察—表象と主体性構築過程の超国家論からの分析—」『ジェンダー研究』18、お茶の水女子大学ジェンダー研究センター: 97-112。
- 永田貴聖. 2005 「在日フィリピン人女性による日常の「戦術」」『コア・エシックス』vol.1、立命館大学大学院先端総合学術研究科: 41-56。
- _____. 2006 「グローバリゼーションの中の生活実践—あるマニラ在住国際結婚夫婦の事例を中心に—」、『立命館言語文化研究』17 (4)、立命館大学国際言語文化研究所: 21-42。
- _____. 2007 「フィリピン人は境界線を越える—トランスナショナル実践と国家権力の狭間で—」『現代思想』vol.35-7、青土社: 116-130。
- マテオ、イーバラ、C. (北村正之訳) 1999 『折りたたみイスの共同体』星雲社。
- Mateo, Ibarra. 2000 *The Church's Nonreligious Roles Among Filipino Catholic Migrants in Tokyo. Old Ties and new solidarities: studies on Filipino communities*, Charles J-H MACDONALD and Guillermo M. PESIGAN (eds.), pp.192-205, Quezon City, Philippines, Ateneo de Manila University Press.
- Parreñas, R. Salazar. 2001 *Servants of Globalization: Women, Migration, And Domestic Work*. California, U.S.A., Stanford University Press.

【政府関連資料】

- 『在留外国人統計年報』法務省
『出入国管理統計年報』法務省

【新聞・雑誌】

- 『日刊まにら新聞』

【ウェブサイト】

- 法務省入国管理局 (<http://www.moj.go.jp>)

An Anthropological Consideration of Filipino Networks in Japan: The Case of Filipinos with Japanese Nationality

NAGATA Atsumasa

Abstract:

Subsequent to major revisions to the 1990 Migration Control and Refugee Recognition Law, the children of Filipinos who remarry Japanese (the step-children of Japanese nationals), Filipinos with close family ties to Japanese (such as third generation Filipino residents in Japan) and others, became legally able to reside in Japan. Also, especially in Metro Manila, many second generation Filipino-Japanese born of the international marriages between Japanese and the Filipinos that multiplied after the 1980s have chosen to retain their Japanese nationality, together with their Filipina mothers.

Such is the background to this paper, which focuses on the human relations formed by informant A, a woman in her early thirties, who I define as a “Filipina,” but who was born of an international marriage between a Filipina woman and a Japanese man, raised in the Philippines and has resided in Japan since eight years ago. Her case is an example of how second generation Japanese-Filipinos raised in the Philippines come to Japan. Based on anthropological research, this paper outlines, in an ethnographic manner, her human relations, which bridge Japan and the Philippines and bring together diverse people.

Keywords: Filipino migrants, Japanese nationality